

## 夜麦搗きの習俗と歌謡

——福島県伊達郡梁川町山舟生地区民謡採訪調査より——

飯 島 一 彦

### 一、民俗採訪と民謡調査

いにしえの日本人がどの様な精神生活を送っていたかに興味があるものにとつて、まるでタイムマシンを使うように、それを考えるよすがが現実として目前に存在しているとすれば、それほど心強いことはない。

文献に残された過去の記録だけでは日本人の精神生活を考えるのには偏りがあるし、まして、記録を残せるような階層の人間たちの精神生活を、それが日本人のすべてだと思ひ込むことにも危険性があるだろう。日本の文化を基盤から支えているのは、記録に残らなかつた人々の発想や感受性なのではなかつたらうか。

そのような想いが、柳田国男を筆頭とする日本民俗学の創始者たちを動かしていたのに違いない。

文献記録にしか残っていないと思われていた行事や発想が、民間の生活習俗（民俗、柳田は最初土俗と称したが）の中に残っている。あるいは文献では理解できなかった内容が、実際の、昔ながらの生活を保っていた山間の民俗を見ているとよく分ってくる。そんなことが度重なって、日本の文化への理解は確実に深まってきたし、それを可能にさせたのは日本民俗学の独特の隆盛であった。

が、それも昭和三〇年代末までであった。昭和三九年の東京オリンピックを境に、高度成長の嵐は、単なる経済現象

にとどまらず、文化的な変容の枠組みをもって首都圏から全国津々浦々へ吹き荒れ、ほぼ一五年ほどの間に、日本人の生活風景を一変させてしまった。

昔々、よき時代に味わえた、民俗学者の至福の瞬間——山道を汗を拭き拭き辿っていくと、忘れ去られたような小さな村があって、そこではまったく昔ながらの生活感情と習俗が残されているのを発見する、などというお伽話すら、今では持つのが不可能になるほど、平地の民の生活も、山村生活もすっかり変わってしまったのである。

生活風景、生活様式の変化は、当然生活習俗に纏わる精神生活の変化をもたらし、古来の民俗は記憶の中に埋もれていくことになる。

したがって現在の民俗探訪は、大抵の場合そうやって記憶の中に埋もれてしまった民俗生活の有様と、その生活感情を掘り起こすという形を取らざるをえないのである。

筆者は民俗学が専門の学徒というわけではない。国文学の分野で「ウタ」の表現を明らかにして行きたいと思ううちに、音楽学の方法も、民俗学の方法も必要になったというだけに過ぎない。民俗の中で「ウタ」がどの様なありかたをしてきたのか、どの様な力を持ち得たのか、それを探ってみたいと思うのである。

この十数年来、夏期を中心に、微かになりつつある民俗の中の「ウタ」（民俗歌謡という意味での民謡）の記憶を掘り起こすことをしてきたが、「ウタ」も矢張り生活に根差したものである限り、民俗生活をきちんと知っているお年寄りではなくては、「ウタ」の話もできにくくなっている。

具体的な年齢層から言えば、現在で七十代後半以上の農村生活人でなければ、一人前の大人になってから、村の生活に必要な数々の民俗を主体的に手に入れることができなかったたのである。それ以下の世代だと、青年団活動による生活改善運動や、戦中戦後の混乱、また高度成長期の主たる担い手として、民俗生活を失う方向につき進んだ世代であるから、はかばかしい聞き取りもできなくなってきている。

稀な例として、昭和七年生まれの田植え唄（むろん実際に田植えをする時に歌った唄である）の名人阿部清三氏に、平成元年岩手県江刺市梁川地区で出会ったことがある。

この方は、家が貧しかったため、小さい頃から、田植えの手間取り（田植えの手伝いを賃仕事としてすること。隣近所の共同作業であるユイとは違う形態の労働）をして稼がなければならなかった。手間取りを頼まれる条件は、仕事（植える手）の早さと、上手に田植え唄を歌うことであつたので、子供の頃から一所懸命田植え唄を練習したのだそうである。

昭和二十年代の、まだ機械が田圃に入る前の頃、昔ながらの田植えの風景の中で、十代半ばの彼は、手間を稼ぐために二十才も三十才も年上の大人に伍して働かなくてはならず、また、確かにそのように働いたのであつた。そしてその時培った彼の喉は、四十年経つてもその時の田植え唄を忘れてはいなかったのである。

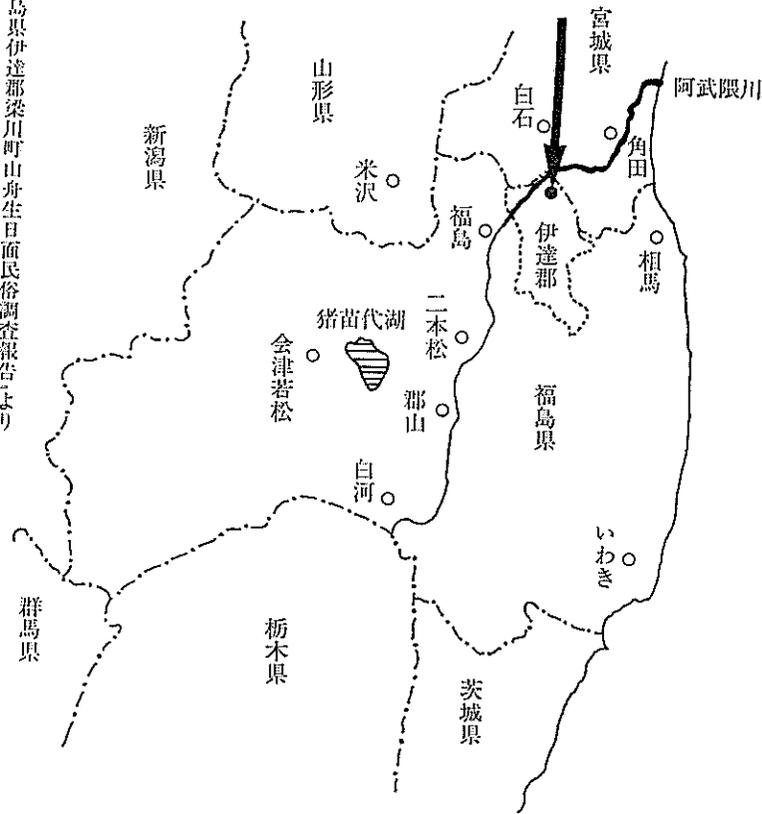
彼の世代は普通、一人前の働き手として扱われるようになった頃は、田圃に機械が入ってきていた。結婚して一家を構え、田植えの労働を共同作業の中でリードして行く年頃には、もう、手植えによる田植えの作業そのものが、ほとんどなくなっていたのである。

現在でもしぶとく残っている民俗は、多くは、祭や芸能にかかわるものが中心となっていて、個人の生活の中では簡単に消えて行ってしまうものが、共同体を確認する精神的な紐帯として、多大な努力を払って維持されていることが多く。

田植え唄のような、労働に纏わる民俗と固有に結びついたウタは、労働の形態そのものが変わってしまえば、民俗として残る理由を失ってしまう。日本の農山村の労働の形が急速に変わった現在では、この様な労働に纏わるウタも七十年代後半以上の世代の人々の記憶の中からでないと、浮び上がらせることはできなくなってしまった。

二、本稿の調査の対象と概要

地図1 福島県伊達郡梁川町山舟生地区の位置



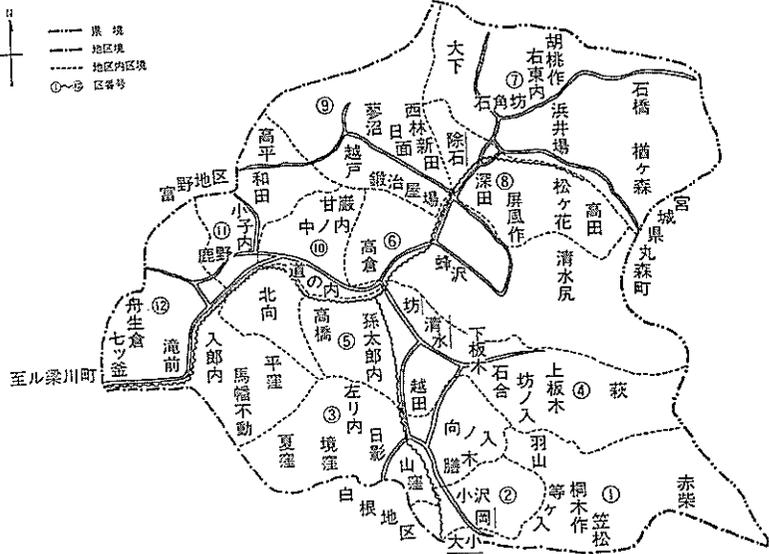
『福島県伊達郡梁川町山舟生日面民俗調査報告』より

平成三年夏、福島県中通の北端に当たる、旧伊達郡に属した梁川町と、隣接する宮城県伊具郡丸森町で民謡調査を中心とする民俗探訪調査を行なった。阿武隈山系の北端、福島市内を中心とする中通りと、浜通りの相馬地方を結ぶ山間地である。

梁川町全域の調査を試みたが、やはり福島市に連なる平野部に開けた梁川町市街周辺では、生活の都市化が進み、民俗に根差したウタのありかたがどうであったのか、調査をすることは難しかった。

が、梁川町でも、隣の丸森町との境界近くの山間部では、お年寄りの話の中から貴重な調査結果を

地図2 梁川町山舟生地区行政区図(地図1と同じく引用)



名のとおり夜行なわれる作業である。粗搗きを終えた麦は穀入れに入れられて貯蔵され、その都度食べる量に応じて

夜麦搗きの習俗と歌謡

得ることができた。その中でも特に本稿では、山舟生地区における調査で得られた、往時の労働と離れがたく結びついてきたウタ(いわゆる労作民謡)の一例として、「夜麦搗き唄」と「夜麦搗き」の習俗とのかかわりについて報告し、民謡が唄われることの意味について改めて考えてみたい。

梁川町周辺は東北地方でも随一の麦(大麦)の生産地である。現在でもそうであるが、以前はもっと作付け面積が多かったそうである。水田の耕作面積が比較的少ないのと、収量が低いので、どうしても主食の一つとして、麦を栽培しなくてはならなかった。山舟生地区では米四麦六の麦飯が普通の農家の普段の主食であったという。従って、米よりは手間の掛かる麦の脱穀は、重要でかつ労働量を要する作業であった。

夜麦搗きというのは、夏、収穫を終えた麦(粒食用の大表である)の実を、麦打ちをして穂から落とし、のぎを取った後、さらに表粒の固い外皮を臼でついて剥く作業である。これは粗搗きの段階で、男手を必要とし、八月いっぱいごろまでは、昼間の仕事を終えた男たちによって、その

仕上げづきがなされるのである。

この、夜行なわれる粗搗きの際にウタが唄われた。麦搗き唄である。それだけではなんの変哲もない労作民謡なのであるが、夜麦搗きという作業と、麦搗き唄というウタとの間に大変面白いかわりが存在したのである。単純に労作民謡と言っては「麦搗き唄」のウタとしての表現は分らなくなるのであった。

民謡研究の第一人者であった故浅野健二氏は『日本歌謡・芸能の周辺』のなかで、東北民謡の項において次の様に記された。

また米について盛んな麦作は、その八割が阿武隈台地から生産されると言われるように、福島県浜通りの相馬地方には美しい陰旋調の「麦搗き唄」がある。

麦も搗けたし 寝ごろもきたし うちの親たちやア ほんとに寝る寝ると

毎年夏が来ると、麦打ちの処理が終わった後、夜業仕事に若い男女が夜麦搗きをする。庭に幾つもの臼を並べ、一つの臼に二人ずつ横杵（昔は手杵）で向かい合って搗くのである。

確かに類似の麦搗き唄は、相馬市周辺のみではなく、宮城県南部、そしてこの梁川町周辺にも分布していることが、既に『日本民謡大観』や『東北民謡集』、『福島県民謡緊急調査報告』、『宮城県民謡緊急調査報告』などで報告されている。

また、習俗としての梁川町山舟生の夜麦搗きについては、既に昭和五十四年十月に成城大学民俗学研究会によって、『福島県伊達郡梁川町山舟生。面民俗調査報告書』のVI人生儀礼二婚姻の項で次の様に報告されている。

麦つき・米つき 夏の夕方には、娘や婦人達が麦つきをし、冬には米つきに集まった。蓼沼と日面は別々に仲間の家を交代でまわる。麦は一ウスに二人でかかり、カタヅキ、ナカヅキ、シアゲと三回つく。米は一ウスで八升がつけた。娘達が麦つきや米つきをしている所に若い衆が五、六人で夜遊びにくる。麦つきうたは次のようなものであった。

きねの枕にうすのかげ 麦ついて助らば片肌脱いで おらも助らば丸はだか

麦もつけたし寝ごろもきたし うちの親達あねろねろと

色男の顔が見たさに 誰か来たような垣根の外 鳴いた鈴虫 音を止めた

以上の記述・報告では窺えなかった点について、今回幾つかの新知見が得られ、また、音楽的にも興味深い事例を見ることができたので、報告し考察を加える。

### 三、調査実績（夜麦搗きに関わる分）

#### ◎調査日程

平成三年八月二十七～三十日

#### ◎探訪地

福島県伊達郡梁川町山舟生地区

#### ◎追調査日

平成三年十一月四日、十二月一日

#### ◎調査者

飯島一彦、飯島みほ、伊藤 健、中井 彩

#### ◎本稿に関わる伝承者一覧

齋藤ヨシイ 女（明治三十五年四月五日生）	宇大小在住
齋藤 ヨリ 女（明治三十八年五月五日生）	宇坊 在住
佐藤 嘉助 男（明治三十六年七月十二日生）	宇清水在住

八巻ミツイ 女（明治三十八年生）

宇日面在住

幕田 忠 男（昭和五年九月二日生）

宇除石在住

◇坊・清水・日面・除石地区でかつて行なわれていた夜麦搗きの習俗

（斎藤ヨリ氏、佐藤喜助氏の話から）

麦の収穫は六月いっぱいまで終わらせた。そうして麦打ちを行ない、搗ける状態にした。八月いっぱい頃までの二箇月間は夜麦搗きを行っていた。麦搗きの作業は荒搗き―搗いた麦を干す―唐箕にかける―仕上げ搗きという手順で行なわれるが、夜麦搗きはこの中の荒麦搗きの作業のことである。だが、坊・清水部落では、荒麦搗きは男が朝早くや天気の良い時などに搗いた。というのも麦の外皮は硬く、男の力でなければ搗けなかったからである。そうして仕上げ搗きは女衆が行ない、家族のものだけで麦搗きは済んだ。仕上げ搗きは食べる分だけを搗いたので女衆だけで搗けた。

一方、日面・除石部落は豊かな家が多く、麦の収穫量も多かったために、女衆は各家を行ったり来たりして手伝った。またその家に手間取りに来ているものも夜麦搗きを手伝った。そこへ他の部落からも若い男衆が夜遊びがてら、娘に会うために手伝いに来ていた。夜麦搗きをいつ行なうかについてはその家の主人が息子や娘と相談し、他の家と重なることの無いようにしていた。そして家族から他の若い衆へと情報が流れ、夜麦搗きが行なわれる。夜麦搗きを行なう家では臼と杵だけ用意しておき、その他は一切構わなかった。

場所は、月の明るい晩などは、外の庭で、暗い晩は「からの屋」（物置小屋）で行なった。むしろを敷いて臼を幾つか（三〜六）並べて置き、杵は横杵（ヨリ氏は手杵）で搗いた。集る人数は十人前後であった。

夜飯が終わってから集り始め、用意された麦が搗き終わるまで行なわれ、大体十時頃までかかった。格好は普段と変わらない。むしろの上には履き物を脱いで上がり、男女が向い合って「相搗き」をし、話などしながら搗いた。あぶれ

てしまった者たちは、周りで座って交代するのを待っていた。興が乗ってくると歌が始め、他の臼のものたちや待っているものたちも一緒に歌った。唄を歌うことで搗く調子を合わせたり、作業の単調さを紛らわせたりするということよりも、目の前の相手と楽しむためという意味合いが強かった。

唄は男と女に関するものが多く歌われたが、即興で歌を作ったりすることはなかった。たとえばこのような歌が歌われた。

はー 俺とゆかねか 裏山に あけびとりさ ゆかねえか

高い山から 谷底見れば 赤いたすきの 女が見える

島田娘と 夏吹く風を そよと入れたい 蚊帳のなか

島田娘と 垣根の芋は 掘られながらも 絡みつく

娘十六七は してもしたがる 針仕事 今朝もしてきた 寺参り

向い小山の崖がけ のつつじ およびなれば 見て暮らす

へのご鉄砲にして 笹藪こげば ししもむじなも 皆逃げる

へのこの皮 下駄の緒にすれば いくら履いても脱いでも 切れやせぬ

べっちょの皮 袖口にすれば いくら抜いても挿しても 切れやせぬ

（以上、斎藤喜助氏）

麦を搗くなら 男と搗きやれ 男ちからで 麦の皮剥ける

（以上、斎藤ヨリ氏）

一緒に麦を搗くうちに、仲の良くなる男女もいて、手拭いを交換する人たちもいた。口説きの決め手となるような唄はなかったが、目と目で通じた。夜麦搗きが終わってからは、若い娘と残ったり、送って行ったりしたものたちも

おり、来る時は何人か連れ立って来たのが、返りはバラバラに帰った。親たちも、夜麦搗きに関しては大目に見ていた。それが縁になって結婚する男女もいた。ただ、普通の結婚の形式をとって結婚するので、周りには後から本人が言っただけだった。

◇岡・大小・日面・除石地区でかつて行なわれていた夜麦搗きの習俗

（斎藤ヨシイ氏の話から）

麦は七月十日頃までには刈り取りを終え、麦打ちをしておいた。そうして麦を搗ける状態にしておき、「穀入れ」に入れておいた。盆過ぎから夜麦搗きを始め、十月の始め頃まで行なった。

夜麦搗きは男も女も搗き、ユイをして歩いた。その場へただの手伝いで来るものはほとんどいなかった。一晚に一日（二斗白）毎晩搗いていた。搗くときには男と女が相搗きし、横杵（昔は手杵）で搗いた。話をしたり、皆で唄を唄ったりしながら搗いた。唄は作業の単調さを紛らわすために歌った。歌われていた唄は

搗いて助られて ただ帰されぬ アードカンドカン 杵を枕で ほんとに白のかけ ハードカンドカン

麦も搗けたし 寝頃も来たし 寝頃も来たし うちのばっばや 孫寝る寝ると

麦を搗くなら 七から八から 三から四からは ほんとに誰も搗く

一方、日面・除石は家柄が揃っていたので、たくさん麦を搗いていた。そこへは若い男が夜遊びがてら遠くからも行っていた。中には見染めた人を目当てに通った人もいた。夜麦搗きが縁で結婚した人たちもあつた。

四、夜麦搗きという場の差異と麦搗き歌の表現

如上の探訪調査の結果から、地区によって夜麦搗きの形態に差異があつたことが分かる。棒・清水地区では家族で麦きを済ませていた。岡・大小ではユイ（隣近所の共同作業、労働力の貸し借りする。）で麦搗きを行っていた。日面・除石では、家族以外のもの、手間取りに来ているものや他の部落から若い男たちがやってきて一緒に夜麦搗きを行っていた。

この違いは、第一に地区によって生じる経済的規模の差によるものと考えられる。日面、除石では比較的豊かな家が多かつたようである。伝承者の表現では、「家柄が揃っていた」となっているが、この地区は、宮城県丸森町に抜ける街道沿いでもあり、傾斜地が多いが、開けた地勢となっている。手間取りという労働力を常時必要とした地区は周辺ではこの地区だけだったようである。当然麦搗きをする労働力も多大に必要なわけである。他の部落からさえ若者がやってきて、手間の掛かる労働を手間賃なしでやってくれれば、それに越したことはあるまい。それに比して、他の地区ではよそから手伝いに来てもらう必要がなかつたのである。一家族、もしくは隣近所でユイをするだけで人手は間に合つたのだ。

経済的規模の差によつてもたらされる作業形態の差異は、作業の性格の違いをももたらしている。

日面・除石では、夜麦搗きが行なわれる家の親たちは準備だけをしており、後は一切構うことがなかつた。つまり、親たちには、庭で行なわれる夜麦搗きの様子は分からなかつたわけであるが、このことは、夜麦搗きの場で男女が出会うことを認知していたことになるだろう。また、他の部落からも夜麦搗きの場に若者が出かけ、実際に夜麦搗きが縁で結婚した男女もいたという事は、山舟生において、夜麦搗きが男女の出会場の場として社会的に認知を得ていたということにもなる。経営規模の大きな農家の主人にとっては、手間賃を出さずに麦搗きをしてもらえるという対費用効果もあつたわけだが、実際に夜麦搗きの場に参加するものたちにとっての意味は、作業の形態をとりながら、農村生活には数少なかつた男女の出会場の場、楽しみ場の場であつたのだ。

一方、他の地区では夜麦搗きは純粹に労働作業としての性格しか持ち得ていない。一家族あるいは、ユイにおける食

料を確保するための労働の一環としての夜表搦きだったのである。

このように、一見同じ様な夜表搦きという作業でありながら、山舟生には異なった性格の二種の夜表搦きが存在していたということになる。採集できた表搦き唄の歌詞はどれもさほど特徴的なものではないが、あからさまに男女の関わり、あるいはあけっぴるげに性交を思い起させて（いわゆるバレ唄の表現）、男女が（主に男性だが）互いに誘い合う表現となっていると考えざるを得ない。

それに対して、単に労働作業としての意味しか持ち得ない場での表搦き唄は、たとえ同じ様なバレ唄の表現であっても、表現上は作業唄の性格しか持ち得ない。伝承者の言葉にも「唄は作業の単調さを紛らわせるために歌った。」とあった。ここではバレ歌の表現は、昼間の労働に疲れた上での夜の重労働を、少しでも楽しい場にし、眠気を覚ますための夜業唄の意味しかない。

後に示すように、この二つの違った性格を持つ場で歌われた表搦き唄は、表搦きという作業にあったテンポで唄われる。その点では二つの場になんら違いはない。表搦きという作業の様態、歌われる唄と作業との見掛け上の密接な結びつきは、これら二つの場で歌われる表搦き歌の表現になんら積極的な弁別をもたらすものではないのである。

しかし、作業に参加するものの意識の違いにより、見掛け上は同様の作業であろうとも、そして、同様の唄が歌われようとも、各々で歌われていた唄の性格、表現上の意図は明らかに違ったものとなっている。

男女の出会いの場として機能していた日面・除石地区の夜表搦きの場で唄われた表搦き唄は、一見作業唄の様に見えるながら、実際は男女が互いに情を交わすための表現として機能していたことにならう。

それに対して坊・清水・岡・大小の各地区では、表搦き唄は純粹に作業唄として機能していたということになる。同じウタが、表面上同じ表現を持ちながら、場の差異によって、まったく違う機能を果たす、つまり、まったく違う表現意図を付与されるという点についての好例がここに存在した。

通常の言語表現としてみた場合、表現意図は表現に先立って存在すると考えるのが普通であるから、本稿の扱った民俗に見られる表搦き唄の果たしている機能の違いは、その理解を不可能にする事例に見る。しかし、このような例は、歌謡にとっては屢々起こることであって、特殊には属さない。

なぜ歌謡には、場の制約によって、表現意図が後天的に付与されるという構造が存在するかは、大きな命題である。

ここでは、本調査によって得られた事例のみについて考察するならば、表搦き唄が夜表搦きという場の違いによって、二つの別の機能をそれぞれの場で発揮する理由は、以下の様に考えられる。

歌謡は本来的には問い掛けの性質を必ず持つて表現される。なぜなら、歌謡は言語・音楽の両面にわたって、共同性の堅固な枠組みの中で表現される非日常的な表現だからである。これは別の面から言えば、現にそこに居て、そのウタを非日常的なものとして受け止めるものが必ず必要となる、ということでもある。かつては決して不特定多数をあらかじめ予測してなされる表現ではなかった、ということだ。

特定の少数、もしくは多数が聞き手として保証される時、初めて、歌謡は聞き手に対して歌われることになる。なぜなら、歌謡は自分に対してのみ、もしくはそこにいない誰かに対してのみ歌われるということはあり得なかったからだ（1）。

問い掛ける行為において重要な位置を占めたのが、やはり男女の問い掛けであったらう。そして作業の仲間に対して、さらには神に対しての問い掛けである。

作業としての夜表搦きでバレ唄が歌われるのは、もちろん直接的には作業の仲間呼びかけて眠気を覚ますためであるが、そこには豊穡への期待もあるだろう。性的な期待感を込めた歌謡表現は、田植唄と同様な意味を持っていたと言えらると思う。

それに対して、男女の出会いの場としての夜表搦きで歌われる表搦き歌では、呼び掛けそのものが直接的な男女関係



第四に、音階の違いを指摘できる。斎藤氏の歌は、典型的な陽旋法（いわゆるヨナ抜き音階）であるのに対して、幕田氏のもとは典型的な陰旋法である。但し、最後の部分に裝飾的な陽旋法の旋律への転調を行なっている。陽旋法から陰旋法への変化は、民謡から芸謡への変化に伴う音楽的变化として古くから挙げられている特徴である。現代では陽旋法・陰旋法という言い方は、日本の音階論としては不適當とされているが、この事例は余りにも典型的なのであえて使用した次第である。

以上の諸点を眺める限り、斎藤氏の麦搦き歌と幕田氏のそれとは、麦搦きの実際の作業が行なわれていたか否かによる民謡の変化が起こった事例として、典型的なものと見ることができると報告されている周囲の麦搦き歌を見ても、前記四点の変化を除く部分ではこれほど一致するものはないから、山舟生における麦搦き歌の変化と見て間違いがないものと思われる。

その点では、第二節に引いた浅野健次氏の言う麦搦き歌は、実際の麦搦きの作業から離れた段階のものである可能性が高いと言えるのではないだろうか。

最後に、採訪調査に協力していただいた山舟生の伝承者の方々に深く感謝の意を表し、本稿を終わることとする。

【註】

(1) この点については「ウタの自立―梁塵秘抄第四五七番歌から―」（『梁塵』第十一号、平成四年十二月）において詳細に論じた。

※ 第三節及び第四節の前半は、調査に同行した現在本学経済学部四年の伊藤健君の手になるものを改稿したものである。調査の手配やテープ起こしの労をとってくれた伊藤君の協力、同じく採訪調査に同行し、記録・聞き取り等について協力を得た本学外国語学部三年の中井彩さん、および荊妻みほに深く感謝する。